

平成20年9月30日
大分県農林水産研究センター
安全農業研究所

トマト黄化葉巻病の対策について

本年は、トマト黄化葉巻病の診断事例が多く、すでに定植済みの冬春トマトの現地調査でも圃場の10%以上が罹病している事例があり、これから本病の被害拡大が懸念されます。本病はタバココナジラミ（バイオタイプB及びQ）によって媒介されるため、タバココナジラミを主体とした防除が重要です。

このことから、以下のことに留意し防除を徹底しましょう。

1 発生の状況

- 1) 9月における本病の診断依頼では、7圃場のうち5圃場で罹病株が確認されている。
- 2) 本病が確認された地域は県内トマト産地のほぼ全域に及び、多いところでは発病株率が10%以上の圃場が認められている。
- 3) 9月中下旬の夏秋トマトの巡回調査では、9圃場中1圃場で本病を確認している（昨年同月は未確認）。
- 4) 9月中下旬の夏秋トマトの巡回調査では、コナジラミ類が平年より少ないものの、前年より多く認められている。オンシツコナジラミが発生している圃場が多いが、タバココナジラミとの混発圃場も認められている。
発生圃場率 : 37.5% (平年: 55.2%、前年: 28.6%)
平均株当虫数 : 2.2頭 (平年: 11.0頭、前年: 0.8頭)
- 5) 本虫は高温乾燥条件で発生が助長され、気象予報によれば気温は高い確率が50%と予想されており、今後発生による被害拡大が懸念される。

2 タバココナジラミの防除対策及び留意点

- 1) 早期発見に努め、発生を認めた場合は直ちに薬剤散布を行う。
- 2) 本虫は雑草にも寄生して増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。
- 3) 罹病トマト株はウイルスの獲得源となるので直ちに処分する。
- 4) これから定植する冬春トマト産地では、育苗時期からタバココナジラミによる吸汁加害を受けることが懸念される。よって育苗期から防除を行うとともに、育苗期後半（定植数日前）にジノテフラン粒剤やニテンピラム粒剤等を処理すると効果的である。
- 5) 育苗期から防虫ネットなどを使用し、本虫の侵入を阻止する。
- 6) 大分県農林水産研究センター安全農業研究所ホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照に適切に使用する。なお、薬剤によっては、指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用する。
(ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/oita/>)